A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

32

プルースト

失われた時を求めて

囚われの女　鈴木道彦訳

中央公論社

世界の文学　32　©1966

プルースト

訳者　鈴木道彦

Illustrations :
Droits réservés S. P. A. D. E. M., PARIS

昭和41年1月1日初版印刷
昭和41年1月10日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　中央精版製本部

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

世界の文学付録36
第32巻
プルースト

目次

プルースト研究のことなど　井上究一郎
プルーストとヘンリー・ジェイムズ　中村真一郎
プルースト知らず　島尾敏雄
『カラマゾフの兄弟』について　唐木順三
読書の手引き　訳者略歴　編集室だより

昭和41年1月
中央公論社
東京・京橋二ノ一

プルースト研究のことなど

井上究一郎

『囚われの女』のこんどの訳者、鈴木道彦さんは、すくなくとも、『失われた時を求めて』のこの編に関するかぎり、原文研究家として、指折りの専門家である。フランスに滞在して、直接手稿本その他について比較検討し、フランス語で発表した本編に関する論文は、世界のプルースト研究家の目をみはらせたものである。このような研究の分野では、『失われた時を求めて』三巻本、いわゆるプレヤード文庫版の本文校訂家、ピエール・クララックとアンドレ・フェレを別にすると、イギリスの若い教授、アンソニー・ピューがいるだけであろう。その点でも、こんどの翻訳は価値の高いものといわなくてはならない。

プルーストの愛好家は多いが、専門的に本文批評の研究となると、そうだれにもできるものではない。ヘスペリデスの庭のりんごをねらうようなもので、現物のまわりには、おそろしい警戒網がはりめぐらされている。そんな障害をどうにか乗り越えたにしても、時間や余裕に限度がある。現物を目にするだけで引き返さなくてはならない場合が多い。さいわいなことに、鈴木道彦さんは一九五五年～五七年に、私は遅れをとって一九五七年～五八年に、プルースト自身の手稿中、各自の問題の部分を、私蔵者の自宅で直接閲覧し、また貴重なマイクロフィルムを、ガリマール社で精読することができた。いまさら書くのは気がひけるが、それぞれに苦心を重ねたし、それに時期の点でも、好運に助けられたといえる。なぜなら、そのあと、プルースト自筆の資料は、まとめてパリ国立図書館に移管、秘蔵され、その一部がガラスのケ

イリエ（コンブレー）のマドレーヌを売る店

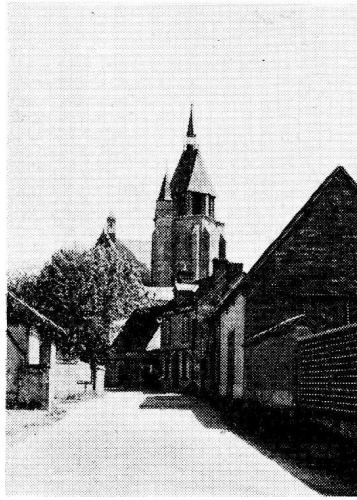
ースを透してはじめて公開されたのは、やっと今年になって、夏から秋にかけての、マルセル・プルースト展覧会中でしかないからである。今後何年たったら、その全貌が陽の目を見ることであろう。なお、この展覧会の組織委員長となったのは、前駐日大使で現国立図書館長、エチエーヌ・デスリ氏である。またそれと時をおなじくして、プレヤード文庫別冊の『アルバム・プルースト』が刊行された（このアルバムのなかの、プルーストの故郷、イリエの写真二十三葉は、私が提供した）。

ところで、鈴木道彦さんも私も、相前後して、じつに小まめに、プルーストの残した跡を追った。あるときは、いっしょに、原稿保管者だったプルーストの姪、マント夫人の自宅で、昼食をごちそうになったことがある。相前後して英仏海峡をわたり、マンチェスターに、いまは亡いリーフスタール夫人（プルーストのラスキン翻訳助手をつとめた）を訪ねた。道彦さんは、プルーストの埋没作品『ジャン・サントゥイユ』が執筆された、ブルターニュの辺境、メグメイユまで出かけて、調査報告を私に送ってくれた。私は私で、プルーストとネルヴァルとの作品構成に、相似のヴィジョンがはたらいていることを、肉体的に感得し、空間的に把握しようとして、両者の故郷の森野を、地に伏すまでに歩きまわった。いまでは笑いごとだが、そのときは一途だった。もうあのような素朴な気持にはとてもなれないと思う。

これは、いままでに書きもらしたことだが、ロンドンでは、『アダム』誌の編集者の仲介で、ヴァイオレット・シッフ夫人をその部屋に訪ねたことがある。部屋といったのは、シッフ夫人はもちろんロンドン市内の、高級住宅街によく見かける、一戸建ての閑静な独立邸宅に住んでいたのだが、すでに病床にあったからで、それに言語障害もあって、まめまめしい女看護人を介さないでは、

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

客に応接できなかった。『見出された時』の英訳者で小説家のステフェン・ハドソンの妻として、夫とともに、晩年のプルーストに親しみ、美貌の声楽家として社交界で評判だった彼女の部屋は、もはやパリには失われたベル・エポックのなごりをいまにとどめていて、印象深かった。それに彼女が次々と取り出させてくるものが、プルーストの時代や作品をふしぎなまでに喚起した。とりわけ、本編にも登場してくるシャルリュス男爵の相手、モレルのモデルであったピアニスト、レオン・ドラフォスの大写しの珍しい肖像を見せられ、スイスでの彼の末路をきかされたときは、やはりロンドンのソホで、『失われた時』の蔭の人物、ギカ大公の落魄の姿を目にした直後だけに、いっそう作品の現実感をあらたにした。



イリエ（コンブレー）の街

シッフ夫人は、亡夫の著作、『セレスト、その他のスケッチ』を記念にくれたが、本編にも実名で登場するプルーストの家政婦セレストを、作家の死後に庇護したのはシッフ夫妻である。セレストの娘をひきとり、ロンドンの上流家庭で仕込んだうえで、教養ある人に縁づけた。ボードレールの詩の一句、「真心で仕えた女中」を引用して、いまも讃えられているセレストは、モーリス・ラヴェル記念館の管理人を、長く勤めている。シッフ夫人は亡くなった。

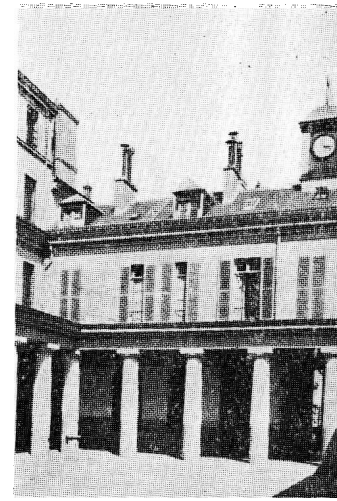
（東京大学教授）

プルーストとヘンリー・ジェイムズ

中村真一郎

私は青年時代に西欧の現代小説を、出版されるに任せて多読した一時期を持った。

それらの小説、特に両大戦間のフランスの小説の大部



プルーストが学んだコンドルセ高等中学校

分は、もう著者の名前も作品の内容も忘れてしまった。歳月は記憶のなかから、残酷にも多くのものを、洗い去ってしまうものである。

私はこの秋、パリにひと月ほど滞在し、散歩の途中で、よく古本屋の店先の棚をのぞいて、その都度、長い間忘れていた、そうした小説類の一、二冊に再会したものだった。私は懐かしさと好奇心との混じり合った気持で、表紙の傷んだ安本を買って帰り、無愛想なホテルの部屋で、暇にまかせて読み返してみた。そうして、大概の場合、それらの小説はおもしろく読むことができなかった。

私はベッドの足許へ、読みさしの本を抛り出して、嘆息した。

それらの書物は青年時代の私の心を揺すり、精神を愉しませ、感覚を解放してくれたものだった。が、「同時代」という繋がりから切り離された現在では、両大戦間の小説の多くは、急速に魅力を失いつつあるのだ。

そうした経験は私ひとりだけのものではない。現に三十年来の友人で、そうして学生時代にお互いに本を貸し借りして、現代小説を読みあさった仲間である白井浩司も、いつか同じ感想を私に語ったことがある。白井は私と異なって、今日に至るまでフランスの現代小説を出るに任せて読みつづける習慣を持続しているのだから、彼の感想は私などよりも正確であるに違いない。

そうした多くの現代小説の価値の喪失のなかで、少数の作品はかえってその存在を鮮かにして行くように見える。廃墟と化した都市のなかで、幾つかの堅固な建造物が、かえって遠くから、その美しい姿を見通すことができるようになるのと似て。

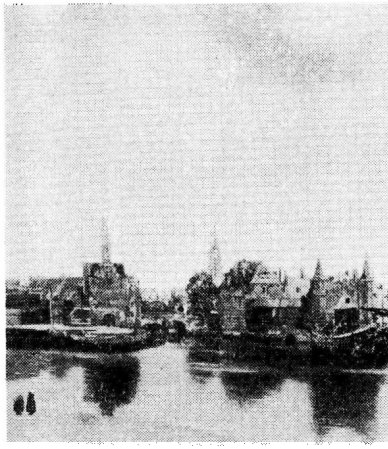
プルーストの『失われた時を求めて』はまさにそうした作品である。

私は、私自身、長年、小説を書いて来た。そうして、

その時々で、様々な他人の作品と対話を続けることによって、私の小説の方法や技術や思想やについての考えを深めて来た。

が、今もなお、その作品のもとへ時々、立ち返って行くのは（勿論、古典は別であるが）プルーストとヘンリー・ジェイムズとである。

――しかし、何と数多くの二十世紀の小説が、かつては私とあれほど緊密な内的関係を結んでいて、そうして今や疎遠となってしまったことだろう。



ヴェルメールの「デルフト風景」（部分）
プルーストはこの絵を見て急に不快を覚え，死を意識したと言われる。

そうしたわけで、数年来の私の精神のなかには、二人の作家が二本のオベリスクのように、並んで立って残された。数多くの作家を遠くへ運び去ってしまった歳月という洪水に耐えて、いよいよその姿を巨大なものに見せてくる二人の作家、そうして私自身が仕事の上で疑問が生じた時に、今なお、そのどちらかへ解決を求めて相談に行く二人の作家、その二人の仕事の、私に対する意味を考えてみるという試みを、私は宿題に持って、この秋に旅に出た。

その問題を考えるのに、最も親切な導き手となったのは、ブリュース・ロウリーという女性の書いた『マルセル・プルーストとヘンリー・ジェイムズ』という厚い本だった。

私は旅の宿で、毎日、その書物を少しずつ読んでは、たくさん、考えるという操作を続けた。そうして、しだいに、この二人の作家の仕事は、私の心のなかで繋がりはじめて来た。

プルーストとジェイムズとは、しばしば批評家によって対比させられて来た。しかし、それは、それぞれの批評家の視点から見ると二人が重なってみえるということ

で、私のなかでは従来、別々の読書体験から、別の場所にこの二人は生きていた。

二人を読んだ時期は、それぞれ異なっている。プルーストに没頭したのは戦争中であったし、ジェイムズが枕頭の書となったのは病後であった。前者は二十歳の私を形成するのに大きな役割を演じたが、後者との出会いは四十代である。それを読んだ時期の生理的社会的背景は、私にとって非常にかけはなれている。

それが、この二つの異なった読書体験が私のなかで、繋がりはじめてきたということは、私には尽きざる興味を呼び覚した。私は考える試みにますます深入りして行った。私にとってのプルーストの興味と、私にとってのジェイムズの意味との調和の発見は、同時に私自身の仕事についての自己発見を導きだしてくれたのだから、この試みは極めてスリルに満ちたものになって行ったわけである。

私はロウリーさんという、パリに住んでフランス語で評論や小説を書いている女性に、今はだから感謝している。

なお、こうした私事を記したのは、読者のなかでも、プルーストと同時にジェイムズを愛している人々が、少なくなかろうかと思ったからである。

（作家）

レオニー叔母の家

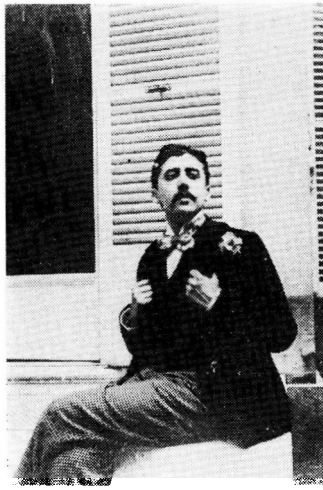
プルースト知らず

島尾敏雄

プルーストは私にとって、わかりにくい。もっともすべての作家が、と言いかえた方がいいかもしれないが。私は根気が足りなくて、すべての作家を中途半端に読んできた。そのたかでも、プルーストの場合は、「特に」

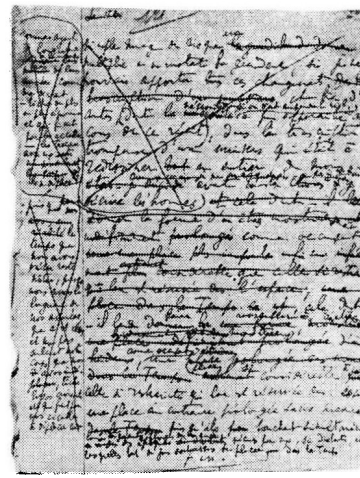
とつけ加えたくなるほどだ。

長い歳月の雑読のあいだには、プルーストについての他人の意見や解説も読んだことがあった。そして写真による肖像も何べんか見たはずだ。私は私なりにその肖像画にある感慨をいだいた。それは、私が好きになれそうもないが、また心のなかですっかり処理してしまうことのできそうにない種類の顔だ。そのひとが、もし自分のまわりにあらわれたとしても、私はそのひとから冷たい目つきの下であしらわれそうな気がする。たぶん、私はそのひとと交際を深めることなしに、行きちがったまま無縁の場所に離れてしまうだろう。しかしそのひとは私がつきくずすことのできない世界を固くもっていて、私は、そのひととふれあうことのできない場所にいる自分、あるいはなにかがはたらいて気まぐれに軽い反発を感じなければならぬ心のうごきのなかにいる自分、について思い知らされることだろうと思う。



プルースト（1905年ごろ）

私の記憶のなかのその肖像は、目と口ひげに強い特徴をただよわせている。その二箇所の造作のゆえに、私は彼を好きになれないのだとも思う。もしかしたら、彼自身そこのところがいやでたまらなかったのかもしれないが、彼はそこのところをそのまま容認し人々におしつけることに成功している、などと私の思いはかたむきがちだ。彼の肖像だけが私にそう感じさせるのではなくて、容貌はちっとも似ていないのに、同じような感じのなかに私を引きずりこむ作家の肖像を他に二つばかり知っている。誰と誰だと指差すことは、とりとめがなくなるので差しひかえるけれど、とにかくある共通した感情のなかに私をおちこませることについては、その三人ほどの作家は、三人が三人とも似かよっていて、おかしいほどだ。もし私が自分のからだをとりかえることができるとすれば、その三人のうちのどれかのそれをえらぶかもし



『失われた時を求めて』の原稿，
四度も書き改められている。

れないなどと思いみたこともあった。それは世間に背を向け、世間からも迎えられていないからだつきなのに、妙に、すっくと、たじろがぬ均衡を獲得しているように見える。

さて、また私がプルーストについての言い伝えのなかで圧倒されるもうひとつのことは、彼がコルク張りの部屋に住んでいたなどということだ。言うまでもないことだが、私が自分の目でたしかめ見ない以上、それは、うわさを手がかりに、私の疑心暗鬼がひとりでにつくりあげた虚像のようなものにちがいないが、その虚像に追いかけられて、幾日も幾日も逃亡の路すじをたどらされたのだ、と言ってみてもいいようなところがある。そのはなしは、たとえば小説を書こうと意気ごんでいる青年の意気を阻喪させるに十分衝撃的ななにかを含みもっている。

もう一度、さて、と間合いをおかないと、次のことが書けないのだけれど、そのひとのものを読まないでそのひとの影響を受けているような気がしてくる作家の存在が、もし許されるとしたら、私にとって、プルーストは、そのひとりだと言わないわけには行かない。いさぎよくそうだと言える歯ぎれのよさは、ないけれど、この文章を書いているうちに、なぜか私はどうしても彼のまねをしてきたような気がしだしたのがあやしい。彼のなにをまねしたのか、自分ながらわからないけれど、私はいつかわからぬ遠い幼い日に、どうかしたはずみに彼の小説の断片的な翻訳文をほんのわずか（たとえば印刷された書物の二、三ページほどを）やっとのことで読みとおしたあとで、もうその先を読む根気を失ったまま書物を伏せてしまったにもかかわらず、とにかく読み終えたわずかの文章のなかを貫きとおっているしぶといつくりごと

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

プルーストの告白

1890年ごろ書かれたもの（E．ウォーターマン氏蔵）からの抜萃

性格の主な特徴	愛されたい欲求，もっと正しくは，讃美されるよりも愛撫され甘やかされたい欲求
男性の望ましい性質	女性的魅力
女性の好ましい性質	男性の持つ徳義と卒直な付き合い
主な欠点	《欲すること》を知らないし，できないこと
好ましい仕事	愛すること
住んでみたい国	望むことが魔法のように実現される国。そこでは愛情はいつも二人の共有物である。
好きな色	美は色彩の中ではなくて調和の中にある。
愛する花	あの人の花——それからすべての花
好きな鳥	つばめ
好きな作家	今日ではアナトール・フランスとピエル・ロチ
好きな詩人	ボードレールとアルフレッド・ヴィニー
好きな主人公	ハムレット
好きな女主人公	フェードル（斜線で抹殺されている），ベレニス
好きな作曲家	ベートーヴェン，ワグナー，シューマン
好ましい画家	レオナルド・ダ・ヴィンチ，レンブラント
歴史上の好きな女性	クレオパトラ
もっとも嫌いなもの	自分の内にある悪い性質
持ちたいと思う天賦	意志と魅力
好ましい死にかた	よりよき人間として——そして愛されて
自分の金言	言うと不幸がきそうでこわくて言えない

の世界のなにか（もうすこし補足をして言うと、起伏のない退屈な日常のなかからつくりごとの文章的な筋みちをひきだしてくるがまんくらべに似た、精神をひとつにあつめて持続させる方法のようなものの潜在）に、そそのかされて、小説のようなものを書きはじめたのではなかったかと、へんな気持になってきたのだった。

さて（とこの接続詞を三度も使ってしまったが）私は死ぬまでに果たしてプルーストを読み通せるかどうかあやしいものだが、プルーストなんか関係ないと言えるようになるのかどうかも心もとない。

（作家）

『カラマゾフの兄弟』について

唐木順三

もしあのとき、あの本を読まなかったら、いまの自分とはいくらかは違った者になっていたろうと、そう思うことがある。あの本を読まなかったなら、自分はどこか浅く、豊かでなかったろうと思わせるような本がある。読書の極意は邂逅にあると私は思っている。自分の心が渇き求めているもの、但しそれがはっきりした形をとるにいたらず、漠然と、しかも激しく求めているもの、その求めているものを、思わざる僥倖によって、充たしてくれ、明確にしてくれるような読書が、真によろこばしい読書である。読者は作者や作中の人物とともに呼吸し会話し、また黙ってうなずきあうことができる。

私にとって『カラマゾフの兄弟』はまさにそのような本であり、それと出会ったことは私にとってこよない仕合せであった。私は高校の末期からドストエフスキイを読みはじめたが、『虐げられし人々』や『罪と罰』どまりで、『カラマゾフの兄弟』は大学に入った早々に読ん

読書の手引き

本書の理解に必要な事項について特に解説を加えました。

ソドムとゴモラ　『失われた時を求めて』第四篇の表題ともなっているソドムとゴモラは、男性の倒錯（同性愛）と女性のそれを意味するのであるが、旧約聖書創世記第十九章によれば、神はソドムとゴモラの町の住民をその罪悪のために、天から硫黄と火を降らせて亡ぼしたと伝えられる。しかし、この破滅から逃れた住民の子孫は世界のすみずみに散らばった、とプルーストは言う。彼自身の宿命でもあったこの同性愛に対する関心はきわめて深く、作品の中では、第四篇のエピグラフ「女はゴモラをもち、男はソドムをもつであろう」のように、シャルリュス、ジュピヤン、あるいはアルベルチーヌ、ヴァントゥイユ嬢などを中心として同性愛の世界が展開する。この禁断のテーマ――ボードレール、ヴィニー、ヴェルレーヌなどが触れることはあったにせよ――を初めて正面から取りあげたのがプルーストであった。

フォーブール・サン＝ジェルマン　パリで最も古い伝統をもつ貴族街である。セーヌ川にかかるロワイヤル橋、コンコルド橋などによって右岸へ通じるコンティ河岸などの左岸ぞいの地域で、この区域が貴族の高級住宅街としての性格をもちはじめたの

だ。そしてまさに読むべきときに読んだと思っている。当時、私は悪の問題に苦しんでいた。人生を肯定するなら、悪をも肯定せざるをえないというようなことである。私はこの小説の第十一篇『悪魔　イワンの悪夢』にでてくる小悪魔と、実にしばしば話し合った。「自分は不定方程式の x だ」という悪魔の発言、「もし俺がホサナ（神への讃歌）をうたったらどんなことになるか、この地上のすべてのものが消滅して、どんな事件も起こらなくなってしまうだろう」という発言、そういう悪魔の告白はいまでもなお私の耳にある。

アンドレ・ジードはこの小説を五、六回読んだといっている。私も回数ではジードにおとらない。このあいだも、宗教の世俗化の問題を考えるにあたって、作中の『大審問官』の節を読み、感銘をあらたにした。

私にとって『カラマゾフの兄弟』は忘れがたい作品であるばかりでなく、この小説は人類の貴重な遺産であり、また人間とはどういうものであるかを示すヒューマン・ドキュメントである。神のごときゾシマ長老から、悪臭を放つスメルジャコーフまで、人間の諸類型が個性をもって描きつくされている。各の読者の各の関心を、それぞれ充たしてくれるのがこの小説である。

（評論家）

は、パリの都市計画の最初の立案者としても有名な、ブルボン王朝の創始者アンリ四世の特別な配慮を受けてからであり、十八世紀には約二百の大邸宅が立ち並んでいた。そのサロンで貴族の社交界が華々しく開かれ、各世紀を通じて、政治的にも、文学的にも大きな役割を果たしてきた。本書に登場するフランス大貴族ゲルマント大公家はヴァレンヌ街に、クールヴォワジエ家はグルネル街に、つまり、ともにフォーブール・サン＝ジェルマンの中核に所在する。現在では大使館や各省の建物などに利用されている。

乗物　十九世紀後半から今世紀初頭のいわゆるベル・エポック（良き時代）にかけて、それまでの馬車に代わり、自転車、鉄道、飛行機など現代の乗物が登場してくる。本書の中にもこれらの新しい乗物がきわめて新鮮な筆致で描かれている。自転車は大きな前輪のビシクルに改良が加えられた一八八六年以降、大変な流行を見、ブーローニュの森に自転車に乗る女性の姿が増したという。自動車は十九世紀の終わりごろから発達したが、金持の持物にすぎず、短距離の散歩用であった。パリ市内では、市内鉄道は一八九〇年以後、乗合馬車が徐々に廃止され、代わって乗合バスが発達し、一九〇〇年にはすでに地下鉄が敷設されている。飛行機は十九世紀末から実験段階にはいっていたが、実用化は二十世紀になってからである。

■訳者略歴

鈴木道彦

昭和四年、東京に生まれる。東京大学仏文科卒。昭和二十九年フランス政府留学生として渡仏。同三十三年帰国。現在一橋大学助教授、新日本文学会会員。プルーストに関しては、論文として「《囚われの女》覚え書」「プルーストの女性像」「プルーストの《私》」があり、翻訳としては『ジャン・サントゥイユの肖像』(共訳)ほか評論、書簡の訳がある。ほかに、著書『サルトルの文学』、訳書ニザン『陰謀』、ロワ『アルジェリア戦争』などがある。

■編集室だより

□『世界の文学』も今回で、発刊以来ちょうど満三年を迎えました。おかげさまで好評のうちに巻を重ね、編集部一同ますます張り切っております。今後ともよろしくお願い申しあげます。

□ 本巻の挿画には、ガリマール版豪華本より、現代フランス画壇の巨匠ヴァン・ドンゲンの挿画を収載いたしました。本文とあわせご鑑賞下さい。なお、解説および付録に掲載いたしました写真の一部はフランス大使館より提供していただきました。

□ 二月四日に『世界の名著』全66巻の第一回配本、第46巻『ニーチェ』〈手塚富雄責任編集〉が刊行されます。東西三千年の名著を網羅したこの全集を『世界の文学』とともにご愛読下さい。

次回(第37回)配本 2月10日発売

ドストエフスキイ

17 カラマゾフの兄弟 I

東京大学 池田健太郎 新訳

悪徳の権化のような父フョードル、情念の奔騰に身をゆだねる長男ドミートリイなど、人間存在の最も深刻な諸典型を代表するカラマゾフ一族に展開する壮大な人間劇。霊と肉、神と悪魔——人類永遠の命題を、文豪が生涯の思想と芸術を賭して追求する世界文学史上屈指の大作。

挿画は、国立文学芸術出版所版(一九六三年)のA・ゴンチャロフによるもの六枚収載。

(上の画はあずまやで語りあうミーチャとアリョーシャ)

目次

まえがき　3
囚われの女　13
アルベルチーヌについて　489
解説　496
年譜　519

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton